様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２０３

研究課題名（和文）年代記類がつくる歴史世界のなかの『河海抄』

研究課題名（英文）Kakai-sho in the Historical World made by Annals of the Medieval Japan

研究代表者
吉森　佳奈子（YOSHIMORI, Kanako）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：１０３０２８２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　『源氏物語』全巻注釈の早い例である『河海抄』をとりあげ、引用される歴史記述に注目し、作品の内容を理解するためという注釈認識を相対化するような特質について研究、六国史以後、正史をもたなかった日本で、歴史認識はどのように構成されたかを考察した。『河海抄』の、漢字をあてて典拠を記す注が、歴史書を出典とする言葉として中世の古辞書類に採られていることの意味を、とくに国学者の研究に注目して考察した。さらに、『河海抄』本文研究の成果をもとに、従来の文献学的方法に閉ざすのではない、『源氏物語』、『源氏物語』注釈が実際に生きていた空間から本文を見きわめてゆく方法を、学会誌等への論文執筆によって提示した。

研究成果の概要（英文）：Kakai-sho (K.) is one of the earliest commentaries on all of the volumes of the Tale of Genji. The author of this K., YOTSUTSUJI no Yoshinari (Y.), did not write those notes for the benefit of reader's comprehension of the Tale. According to the research representative, Y. commented on the fictional Tale with citations from real history so that he might make that Tale "true history". This attitude of Y., as a result, brought about the formation of the historical recognition of Japan, since the Japanese people did not possess any official history after the "Six National Histories". Scarcely any attention is payed to the old Japanese dictionaries today, since they do not help us know meanings of the vocabularies. However, according to the representative, we can find similarities between the general tendency of the old dictionaries and that of the commentary by Y. The representative thus proved that the old dictionaries were related to the formation of the historical recognition.

研究分野：人文学

キーワード：古代文学　『河海抄』　年代記類　『節用集』　『首書源氏物語』　『湖月抄』　契沖　本居宣長

１．研究開始当初の背景

『源氏物語』の全巻注釈の早い例である『河海抄』（四辻善成著、南北朝期の成立）は、近時、日本の国内外を問わず、歴史学、思想等、人文学全体にわたる価値が注目されるようになり、『源氏物語』注釈書としての意味にとどまらない広い視座による研究が俟たれる状況にあった。しかし、伝本の状況が複雑で、基本となる活字化されたテキストも充分なものではなく、周到な整理、研究を背景とする善本の翻刻、刊行が急務ともなっている。

研究代表者は、夙に、単著『『河海抄』の『源氏物語』』（2003 年、第 6 回紫式部学術賞受賞）を公刊、平成 22 年度から平成 24 年度には、「年代記類の生成と『源氏物語』注釈所引の歴史記述に関する研究」というテーマで科学研究補助金の支援も受け、この状況にかんして、牽引役となる研究を精力的に行っており、その過程で、『源氏物語』の注釈史が、六国史後、正史をもたなかった日本において歴史認識はどのように構成されたかを解明する生きた資料の集積であることに留意するようになった。その成果は日本文学の分野のみならず歴史学の分野からも注目されており、また、海外からの、研究指導や論文執筆依頼を受けるようになるに至り、さらに発展的に研究を行うべく本研究計画を企図した。

２．研究の目的

従来の日本文学研究において、注釈書は、作品をよみ、理解するための補助的役割を担うものと見なされ、必要に応じて部分的に参照され、その全体像や思想史的意義については留意されることがなかった。また一方で、歴史学研究では、物語作品である『源氏物語』とその注釈史が研究対象とされなかった。そのような状況にあって研究代表者は、『源氏物語』をなりたたせた知の系譜という視座で『源氏物語』注釈史に注目して斬新な方法論を提示しつづけてきており、本研究課題においても、虚構である物語作品が生きてきた空間が、同時代の歴史記述の形成に深くかかわっているという独創的な見とおしに基づき、資料の文献学的な精査とあわせ、発展的に研究を継続することで、日本文学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな視点を提示することをめざす。

所謂正史が『日本三代実録』で終った後の歴史記述の問題については、歴史学の分野で、私撰国史にかんする研究成果がないわけではないが、研究代表者は、これまでの研究活動をとおして、『源氏物語』享受の流れのなかで、とくに中世期、この作品が物語でありながら、歴史的事実のように見なされ、先例として機能するようになってゆく状況を指摘してきた。それについて、記録類を調査し、さらに、『河海抄』を中心とする『源氏物語』注釈書が、中世、近世の歴史認識の形成に深く関与しているのではないかという見通しを得るに至った。研究代表者はこれまで、物語の歴史化の事例が認められるのは中世までと考えていたが、本研究課題を企図する過程の研究を通して、近世の、部類、辞書類、広く流布した注釈書類（たとえば、『三教指帰』注など）に、『河海抄』の記事が『源氏物語』注釈書であることからまったく離れて、歴史や、ことの起源にかんする記事として引用されている事例を確認した。その研究によって、この書が『源氏物語』注釈という枠を超えて生きてゆくことの意味の大きさをあらためて確信している。

さらに、『河海抄』の文献学的研究をすすめる。中世、近世において共有された教養の基盤が生成された現場として『河海抄』を捉えだす視座を提案することで、善本はないと指摘されつづけ、本文研究が一定以上にすすまない現状を打開し得ると考える。

単著書におけるテーマである、平安時代末から近世にかけての人々の知の現場としての『源氏物語』注釈史を捉えなおす研究を、文献学的な問題、学問の枠組みの問題もあわせ、より広汎に展望し、文化の継承、歴史認識の生成にかんする新たな視座の提起をこころみる。

３．研究の方法

A.私撰国史生成の問題を中心とした、中世、近世の思想史的な状況にかんする基礎的研究。

B.教養の枠組みの継承にかんする研究。

C.『河海抄』の伝本状況にかんする文献学的研究。

さらに具体的にのべる。

「研究の方法 A」については、まず、『河海抄』に引用される文献のなかで、とくに目を引く頻度であらわれる「日本紀」の問題について考察する。これは、「研究の方法 B」とも関連するが、『河海抄』の「日本紀」が、字書の世界にひろがっていることを具体的にたしかめる。

さらに、『河海抄』と同時代の年代記類をふくむ私撰国史を中心に考察する。『河海抄』に認められる傾向として、起源への興味、初例探求への志向を指摘することができるが、それは同時代の私撰国史、さらに近世になると、部類と年代記類を兼ねるような重宝記のような書も生まれてくるが、それらのなかにも認められ、中世から近世にいたるまでの歴史的記述の特質としてたしかめられるものである。とくに重宝記類の問題は、『河海抄』の「日本紀」が、字書類と繋がっていることからあり得たひろがりであることを具体例にそくして指摘する。

また、重宝記類に認められる、時間軸上に部類的な要素を捉え出す発想は、『河海抄』

と共通するばかりでなく、実際に部類の類に『河海抄』は引用されている。年代記類のつくり出した歴史のなかで『河海抄』がどのように生きていったかという視座から見たとき、従来、既存の歴史書の再構成であるとして、歴史学の分野において殆ど顧みられることの少なかった年代記類、重宝記類の新たな位置づけを提案し得る。

そこに認められるものはいずれも、歴史認識の方法ということができるが、それが『源氏物語』の先例化にどのようにかかわってゆくかを考察する。

「研究の方法 B」については、「研究の方法 A」の成果との連関を確保しながら、中世の字書類に注目し、『河海抄』に特徴的な、和語に漢字をあて、出典を記す注が、古い段階の『節用集』（とくに印度本とよばれる系統の『節用集』）に、『河海抄』を典拠として引用された例が見られることを指摘、さらにそのような注が古字書、中世の言葉にかんする研究世界でどのようなひろがりをつくってゆくか、具体的にあきらかにすることをこころみる。

さらに、『源氏物語』以外の注釈書にも目をやり、『三教指帰』およびその注釈史が『源氏物語』注釈史と緊密な接点をもつことを指摘する。『源氏物語』注釈史と、『三教指帰』注釈とのかかわりについては、対象となる作品がまったく異なるジャンルであるために、従来指摘がなかった問題であるが、古い段階の『三教指帰』注釈書（『三教勘注抄』、『三教指帰注』、『三教指帰注抄』等）と『河海抄』とのあいだに、直接的と推測される影響関係があることを確認し、包括的、総合的に『源氏物語』の生きた空間、注釈史がつくってきたものを思想史的に問う。

「研究の方法 C」については、善本はないと指摘される『河海抄』の複雑な異文状況が、同時代の歴史認識の問題と不可分に生じたものであることを解明する研究として、日本ではじめて出版文化を育てた近世の文化的達成に注目する。そのなかであらわれた、『源氏物語』本文を全文あげた注釈書、『首書源氏物語』、『湖月抄』をとりあげ、前代の注釈書類がどのようにうけつがれたかという問題を考察する。

さらに、「研究の方法 B」の研究と関連させながら、和語に漢語をあてる注に注目し、契沖、賀茂真淵と、本居宣長とでは、注の意味の見いだし方が異なることを指摘する。

同様に、「研究の方法 B」の研究との関連を確保しながら、開板された『三教指帰』注釈と、出版文化のなかの『源氏物語』注釈とのかかわりについて考察する。

研究の全体をつうじて、『河海抄』において、物語の注釈が史実によってなされていることについて、六国史後、正史を持たなかった日本で歴史認識はどのように構成されていったかという問題を、本課題の統括となる問いかけとして研究をすすめる。

４．研究成果

本研究課題における研究成果発表は、「5.主な発表論文等」に記す論文６件、シンポジウム招待パネリストとしての学会発表 1 件、計７件である。

以下、具体的に記す。

論文「『源氏物語』の注釈史について」は、中国、東北師範大学大学院および、長春理工大学大学院の共同研究による、長春理工大学比較文化研究所からの依頼により執筆したもので、「3.研究の方法 C」に記した研究の成果である。『源氏物語』の注釈史を、延宝年間の出版文化から顧み、注の意味の見いだし方の変化についてあきらかにすることをこころみたものである。

同時に、日本の文化的資産が世界の学問レベルで注目を集めようとする現状にあって、入念な基礎研究に支えられた独創的な視座を提示することは重要な責務であることにたいして充分な貢献をし得たと確信するものである。

論文「注釈史のなかの『河海抄』」は、「3.研究の方法 A」および「3.研究の方法 C」に記した研究の成果で、正史が断絶した日本において、歴史認識はどのようにつくられていったかという問題を、さらに『河海抄』の伝本状況への視座をふくんで展開することをめざしたものである。善本はないと指摘され続けている『河海抄』の複雑な異文状況が、同時代の歴史認識の問題と不可分に生じたものであることを具体的に解明する研究の第一段階である。

一方で、年代記類の問題は、歴史学でも、日本文学でも、未開拓の部分の多い研究分野であるが、身分を問わず、近代以前の人々の常識、教養の一隅を構成するものであるという点で重要である。本論文においては、その視座を近世の重宝記類にまでのばし、歴史認識をふくむ教養の基盤の生成の現場に『河海抄』が深くかかわっていることを指摘した。

論文「注釈史のなかの『河海抄』―『首書源氏物語』をめぐって―」は、「3.研究の方法 B」および「3.研究の方法 C」に記した研究の成果である。近世のゆたかな文化的達成のなかであらわれた、『源氏物語』本文を全文あげた注釈書、『首書源氏物語』、『湖月抄』に注目し、出版文化のなかで、前代の注釈書類がどのように生きていったかという問題について考察した。

論文「漢字による和語の注の空間と『河海抄』」は、「3.研究の方法 B」に記した研究の成果である。国学者による『源氏物語』研究と中世の注釈書類とのかかわりの問題をとりあげ、中世の注釈書類に見られる、和語に漢語をあてる注について、契沖、賀茂真淵と、本居宣長とでは、注の意味の見出し方が異なることが、本論文の研究によってあきらかになってきた。

なお、本論文は、論説資料保存会・国立国語研究所編『日本語学論説資料 第 51 号 2014 年』(2016 年　論説資料保存会）に再録されることが決定した。

論文「中世的世界から見た源氏物語―本文と注釈―」は、「3.研究の方法 B」および「3.研究の方法 C」に記した研究の成果である。中世の古字書類にかんする研究をすすめる一方で、『三教指帰』とその注釈に注目した。

『源氏物語』注釈史と、『三教指帰』注釈とのかかわりについては、対象となる作品がまったく異なるジャンルであるために、従来指摘がなかった問題であるが、『河海抄』の検討をとおして、『源氏物語』の基盤のひとつとなっている可能性がうかがわれることに思い至り、また、古い段階の『三教指帰』注釈と『河海抄』とのあいだに具体的な影響関係にあることを確認し、その成果を論文として発表したものである。

『三教指帰』自体、類書ともいわれ、『源氏物語』執筆時に依拠された資料のひとつであるとも考えられる書であるが、ふたつの書の注釈史が緊密なかかわりをもつことを指摘し得たことについては、研究史において注目されることのなかった方向に新たな視座を提案し得た成果であった。

本論文の執筆をとおして『源氏物語』注釈史が依拠した空間の問題に留意する必要性等、今後の研究へのひとつの方向性を得るに至った。

論文「『河海抄』の位置」は、「3.研究の方法 A」および「3.研究の方法 C」に記した研究の成果である。研究年度をつうじて行ってきた『河海抄』本文研究の成果をもとに、従来の文献学的方法のなかに閉ざすのではない、『源氏物語』、『源氏物語』注釈が実際に生きていた空間から本文を見きわめてゆく方向性を提案することを目ざした研究である。

学会発表「女性文学としての中古文学　注釈のジェンダーバイアスを問う」は、「3.研究の方法 B」および「3.研究の方法 C」に記した研究の成果である。注の意味の見いだし方が、契沖・賀茂真淵と、本居宣長のあいだで異なることについては、すでに、論文「『源氏物語』の注釈史について」の研究において指摘していたが、その問題が、本居宣長の段階で、中世期の注釈が主として漢字漢文によってなされる点にたいする自覚的な意識となることと不可分であることを、具体的な注の変化に注目して考察した。

同時に、シンポジウムという場を最大限に生かし、本研究計画の成果公表を総括的に行うことを目ざしたものである。

本研究計画の三年間は、平安時代末から近世にかけての人々の知の現場として『源氏物語』注釈史を捉えなおすことについて、文献学的な問題もふくめ、従来にない広汎な展望によって、新たな視座の提起をこころみてきた。

基礎研究に集中して実績を積むことができたというだけでなく、国内外を問わず研究成果を公表する機会に恵まれ、これまでの自身の視座を対象化し鍛えなおす機会としても有益であった。

『河海抄』について、むしろ海外での関心が高まっていることを実感する三年間であり、本研究計画をめぐる現在の状況にかんがみ、これを日本文化への学問的な省察が要求される機会と捉え、より確かな視座にもとづき、さらなる研究継続をめざす。

具体的には、『河海抄』研究にもとめられている現状、つまり、入念な基礎研究にもとづく善本活字化への要望の高まりにたいし、本研究課題における研究成果、年代記類生成にかんする研究、『河海抄』を特徴づける、漢字による和語の注がどのような世界に繋がるかを解明する研究、それぞれの成果によって捉えだされてきた問題が、従来の文献学的方法では解くことのできなかった『河海抄』の伝本について新たな視座を提案することに繋がるとの見とおしを得た。本研究課題による成果をふまえ、『河海抄』の翻刻刊行に向けて研究を継続してゆく必要性を実感することができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

1. 吉森佳奈子、「『河海抄』の位置」、査読有、『中古文学』（中古文学会）第 96 号、36-44 ページ、2015 年

2. 吉森佳奈子、「中世的世界から見た源氏物語―本文と注釈―」、査読無、助川幸逸郎、立石和弘、土方洋一、松岡智之編『新時代への源氏学 7　複数化する源氏物語』(竹林舎)、144-165 ページ、2015 年

3. 吉森佳奈子、「漢字による和語の注の空間と『河海抄』」、査読有、『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）第 91 巻第 11 号、通巻 1092 号、163-173 ページ、2014 年

この論文は、論説資料保存会・国立国語研究所編『日本語学論説資料 第51号　2014年』に再録されることが決定した（2016 年刊行予定)。

4. 吉森佳奈子、「注釈史のなかの『河海抄』―『首書源氏物語』をめぐって―」、査読無、小山利彦編『王朝文学を彩る軌跡』、217-230 ページ、2014 年

5. 吉森佳奈子、「注釈史のなかの『河海抄』」、査読無、日向一雅編『源氏物語　注釈史の世

界』、191-212 ページ、2014 年

6. 吉森佳奈子、「『源氏物語』の注釈史について」（原文は中国語。蔡苗苗訳）、査読無、中国長春理工大学中日比較文化文学研究年刊 2013『中日文化文学比較研究』、69-84 ページ、2013 年

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 吉森佳奈子、平成二十七年度中古文学会春季大会シンポジウム　女性文学としての中古文学　注釈のジェンダーバイアスを問う」（大会企画パネリスト　於白百合女子大学、東京都調布市）、2015 年

６．研究組織

(1)研究代表者
吉森　佳奈子（YOSHIMORI Kanako）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10302829